

確かな判断力を育てる対話力の育成

—思考を再構築する対話活動を中心に（中学校国語科）—

教育実践研究科 教育実践専攻 教育実践基礎領域
宮田 愛子

I はじめに

1 今、求められている資質・能力

—社会を生き抜く力—

知識・情報・技能が社会のあらゆる領域の基盤として重要性を増している「知識基盤社会」の到来、世界を相手にしたグローバル化の進展等、変化の激しい時代である現在、自立した人間として、他者と協働しながら共存し、たくましく豊かに将来を切り開いて生き抜く力が求められている。

2 現代の教育に求められているもの

—自立・協働・創造を重視した教育活動—

「第2期教育振興基本計画」(平成25年6月14日)において、今まさに我が国に必要なものは「自立・協働・創造に向けた一人一人の主体的な学び」であり、「教育こそが、人々の多様な個性・能力を開花させ人生を豊かにする」と示している。また、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」(中央教育審議会・平成26年11月20日)では、「新しい時代にふさわしい学習指導要領の基本的な考え方のなかで、「自立した人間として多様な他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力の育成」「課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習の充実」等を示している。現代の教育は、「自立・協働・創造」を重視した教育活動が求められている。

3 現代の教師に求められている授業

—資質・能力の育成を図る教育課程の構造化—

「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」では、「新しい時代に必要な資質・能力」を育成する過程で、「何を、どのように学び、何ができるようになるか」という教育課程の構造化が示されている。つまり、現代の教師は「何を」「どのように学ばせ」「何をできるようにさせるのか」を考え、ねらった資質・能力の育成に向けた授業開発や提案、評価が求められていると言えるだろう（以下__は宮田による）。

「新しい時代に必要となる資質・能力」
・自立した人間として、他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力
・我が国の子供たちにとって今後重要と考えられる、何事にも主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーション能力や豊かな感性や優しさ、思いやり等

4 現代の授業開発に必要な視点

—「習得・活用型学力」の育成—

2008年3月に告示された新学習指導要領は、改正学校教育法（平成19年12月6日施行）で示された新しい学力の3要素「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力などの育成」「主体的に学習に取り組む態度、学習意欲の向上」を受けて、「基礎的・基本的な知識・技能の習得型学力」と課題を解決するために必要な「思考・判断・表現による活用型学力」の両者を、バランスよく育成する指導が改訂の大きなポイントになっている。

II 国語科に求められていること

1 国語科における「習得・活用型学力」の育成

—確かな学力・能力の定着に向けて—

国語科は、学校全体や全ての教科の基盤となる言語力を育成する役割を担っている。そこで、「各種調査で明らかとなった現代日本の課題を受けて「自ら課題を発見し解決する力、他者と協働するためのコミュニケーション能力、物事を多様な観点から論理的に観察する力等の育成を重視」「特に思考力・判断力・表現力等の効果的な育成に向け、各教科等を通じた言語活動の充実を推進する」必要がある。そうした考えを受けて、国語科では「習得・活用型学力」のステップについて、学習段階を【資料1】の通り、5つに分けて設定する。

【資料1 国語科「習得・活用型学力」の学習過程（注1）】

学習段階	習得から活用への学習段階 (学びのステップ)
1基礎学習【習得型学習1】 全ての教科の基礎となる学力を育てる学習段階	①話す態度や姿勢・話型 ②メモやノート指導 ③聞く態度や基礎 ④漢字や概念・知識理解と活用の基礎(語彙力、諺、故事成語等)
2基本学習【習得型学習2】 国語科固有の基本となる学力を育てる学習段階	①話す聞く(伝え合う)基本学習・話型・文型、キーワード、具体例と根拠(理由)、レポートの書き方を生かしたスピーチ等
3発展学習【活用型学力1】 「自分の考え・意見をもつ」 「論理的に分かりやすく書く『型』」を育てる学習	①自分の立場や興味・関心から「自分の考え(解釈)」をもつ、 ②「自分の考え」を論理的にまとめる(一貫した主張と構成、キーワード、題名等)

4 発信・交流学習 【活用型学力2】 論理的に伝え合うための言語力を身に付ける学習段階	①「発信」技術の基本モデル学習・・・効果的に伝えるための基本技術、 ②「交流・学び合いを深める」技術の基本モデル学習から活用へ・・・目的・相手・場面・条件等に応じて、論理的に伝え合う
5 評価・一般化学習 自己(相互)評価、他教科や生活経験に生かせるような「学びの一般化」の視点を育てるための学習	①単元全体における「学びの到達度」のチェック・・・自己評価能力 ②新たな課題発見・疑問がもてる・・・他教科や生活場面での活用へ ③学習の「メタ認知能力」を育てる・・・内容の価値や学びの方法、一般化への活用、自己内対話等

2 「伝え合う力」の重視

—豊かな人間性を育む言語活動—

新学習指導要領においても変わらない国語科の目標として、「国語による表現力と理解力を育成するとともに、人間と人間の関係の中で、お互いの立場や考えを尊重しながら言葉で『伝え合う力』を高めること」を位置付けている。「伝え合う力」は、「新しい時代に必要となる資質・能力」にも挙げられた多様性を尊重する態度やコミュニケーション能力に繋がるものであり、他者との協働無くしては生きていけないこの時代に、決して欠かすことのできない「生きる力」である。

21世紀を生きる子ども達が他者と繋がりながら豊かに人生を歩んでいくことができるよう、国語科ならではの視点で「人間的な判断力や想像力・感受性」を育て、「言葉と心、人間性・社会性」を育てる言語活動を取り入れる必要がある。

III 実習校の実態

1 学校・生徒の特徴

名古屋市立A中学校は、全校生徒430人(1・2・3学年共に4クラス)学級数12クラスの中規模校であり、3つの小学校から生徒が進学してくる。「あいさつ」を基盤とした人間尊重が伝統となって受け継がれており、ほぼ全ての生徒がいつでもどこでも気持ちの良いあいさつをすることができている。

IV 研究にあたって—テーマ設定の意図—

1 生徒の実態から—中学校2年—

私が担当させていただいた第2学年では、国語科、英語科、社会科、総合的な学習を始め、様々な教科の中で、言語活動による相互交流、伝え合いを活発的に取り入れている。しかし、男女間の話し合いが活発でなかったり、閉じられた小集団の中だけで話をしてしまったりといった場面を見かけることが多く、全員が主体的に参加しているとは言い難い現状がある。

一方で、毎朝ペアトークを取り入れている学級については、どの生徒も言語活動に対して主体的に参加することができているといった現状もある。また、相互

交流、伝え合い以前の段階で、「自分の考え」をもつことができなかつた生徒は、協働するために必要な初めの考え(ステップ)が不十分なままの活動になるため、言語活動に対する意欲が低く、「自分の考え」を広げたり深めたりできないまま授業を終えるという様子が見られた。限られた学級の時間、授業数の中で、協働的な活動や協働的な学びを行うための人間関係づくりやスキルの習得、全ての生徒が「自分の考え」をもつことができるまで時間を確保することは、どこの学校でも難しく、同様の実態があるのではないだろうか。

2 判断力の育成の重要性

—自立した「自分の考え」をもつ—

国内外の各種学力調査等の実態把握を受けて、日本の義務教育における実践課題の一つが「活用力」の未定着であることが明確になった。そして、今回の学習指導要領の改訂では、主体的な課題解決能力として「思考力・表現力」に「判断力」の文言が加えられた。このように「思考力・判断力・表現力」という3つをセットにしたことが特に重要であり、新たに判断力を加えた意味は5つあると考えられる(注2)。

①日本人らしいものの見方や考え方、生き方をもって自分のアイデンティティーの本質を見抜く力をもつこと②自分らしい感性、生き方、価値観、判断基準をもって「自分の考え」をもてるようになること③他者、他国など自分とは違うもののもつ思いや背景を正しく理解し、相手を受け止めることができるようになること④自分なりの考えをもって物事を評価することができるようになること⑤思考したことを分かりやすく正確に表現するためには、何をどのように表現すべきなのかを「判断」する力をもつこと。様々な人や情報と関わり合いながら、協働的な学びを行うためにはこのような判断力が必要不可欠であると考えられる。

3 対話活動を手立てとする意義・新たな提案

これから重視される協働的な学びにおいては、討論、ディベート等の話し合い活動に対して主体的に参加することが重視されている。それらの根幹となる力が「自己・他者・情報との対話」能力であると考えられる。

これまで対話活動は、「共同性」「対峙性」「場面性」の観点から、あくまで「協働的な活動のための方法」(表面的な学習形態の工夫、意欲の向上)として使われていた。しかし、文章の読解、考えの形成、批評、考察等は全て、自己(メタ認知)、他者(筆者、主人公)、情報(本文、言葉)との対話によって行われるものであるという観点から、対話は活動のための方法としてだけでなく、身につけるべき学力・到達度と学習ステップを明確化する必要がある、習得から活用(探究)全ての学びに必要な能力になってくるのではないかと考えた。

そこで、本実践では、対話活動を従来の「協働的な

活動のための方法」にとどまることなく「習得・活用型学力」を身につけるための「協働的な学びのための方法」としても位置づけ、相互的作用により、確かな学力・能力の定着に繋がりたいと考え、提案するものである。

V 学級づくり実践（教師力向上実習Ⅰ）

テーマ

伝え合い、認め合い、協働する中で
成長し合う学級経営
ークラス全体で対話する言語活動を中心にー

1 テーマ設定の背景と実践計画

中学生という多感な時期、生徒達は友人との豊かな関わりの中で、楽しく充実した時間を過ごしなが、時に苦しみ、時に悩み、自己と他者の間で自らを見つめ直して、人として大きく成長する。

しかし、社会的な問題として「いじめ」が注目されている昨今では、友人とのトラブルを避けるため“自分を出さない生徒”“他の友達の顔を窺って生活する生徒”等、友人との積極的で深い関わりを避けている生徒が増えているように思われる。これは、本当の自分は友人やクラスから認められないのではないか、他の皆と違う本当の自分を見せたら嫌われるのではないか等、自己肯定感の低さが原因であると考えられる。こういった生徒にとって、学校や教室の中に安心できる自分の居場所はない。

教師は、生徒が今を安心して、楽しく学校生活を送ることのできる環境をつくるべき立場であり、将来生徒が豊かに生きていけるよう指導する立場であると私は考える。加えて、言語を扱う国語科の教員である私は、安心できる環境の中で、言葉を通じて人と関わり合いながら生きることの豊かさを見出し、自分で自分の可能性を信じて胸を張って生きていける生徒を育てたい。

そこで、協働的な学習を通じて、お互いの素直で多様な考えや生き方を伝え、受け止め合い、「自分が認められていく」という経験を「対話活動」の中で積み重ねることができれば、他者との関わりの中で自己肯定感を高めることができるのではないかと考えた。

本実践内容ー国語科ー

①協働しやすい授業環境づくり

「様々な物の見方を共有し、表現を工夫してプチ物語を作ろう」（中2教科書教材 文章名人「心情が効果的に伝わるように書くには」ー物語を創作するー）

②コミュニケーションへの関心・意欲の向上

「言葉の力について認識を深め、言葉で繋がることの豊かさの意味を考えよう」（中2教科書教材 田崎真也『感覚を言語化する』）

2 実践内容1ー協働しやすい環境づくりー

本実践では、「自分の意見や考えが他者に認められていく」という実感をもったり「他者の考えを知ることとは面白いんだ」と知ったりすることによる、協働的な学びに対する「積極性の育成」と、ひとりひとりが

自立・協働・創造的な学びのための対話活動

判断力の育成に繋がる対話力

②対話活動による思考の広がり・深まり

協働的な学びの根幹となる自己・他者・情報との対話能力

協働的な学びに必要な基礎・基本的な対話スキル

①向上し続けようとする意欲の継続 成長を実感できる授業

（実習Ⅱにて実践）

①対話活動に必要なスキルを明確にし、習得しようとする意欲が高まるような手立てをとれば、限られた時間数の中でも協働的な学びに必要な基礎・基本の定着が図れるのではないか。

②対話活動を手立てとした協働的な学びを繰り返せば、思考に広がりや深まりが生まれ、考えに広がりや深まりがなかった生徒も確かな判断力が身につくのではないか。

自立・協働・創造的な学びを行うための土台作り

協働しやすい授業環境づくり

コミュニケーションへの関心・意欲の向上

（実習Ⅰにて実践）

協働しやすい授業環境をつくり（規律の確保）、コミュニケーションの楽しさや奥深さを実感（積極性の育成）することが出来れば、協働的な学習に取り組もうとする意欲が高まるのではないか

また、以上の過程で加えて3つの効果が出るのではないかと考えられる。

①協働的な活動に主体的に取り組む姿勢の育成

傾き、共感等により、安心して自分の考えを発表出来る環境をつくることができる（「第2期教育振興基本計画」より）

②国語科学習指導要領の観点の達成

第2学年「話すこと・聞くこと」目標

「相手の立場を尊重して話し合う能力を身につかせると共に」

第2学年の「話し合うことに関する指導事項」

「オ 相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げること」（「中学校学習指導要領 国語科」より）

③人間性・社会性の育成

コミュニケーション能力の育成、良好な人間関係の形成（「新しい時代に必要となる資質・能力」より）

対話スキルに基づいて、協働に必要な基礎・基本的な力やマナーを身につけることによる「規律の確保」という観点から、『文章名人「心情が効果的に伝わるように書くには」—物語を創作する—』という教材を使い、協働して物語を創作する授業を行った。

(1) 導入・基礎学習【習得型学習 1】

物語に重要な「設定」「描写」について、『劇場版名探偵コナン』の始めに流れるセリフを取り上げ、画像と共に説明した。

(2) 基本学力【習得型学力 2】

“全員で協力してグループでひとつの物語を作る”という本時の活動を説明。今後の様々な活動や人間関係（コミュニケーション能力）に必要な「対話スキルの習得」を行うために、グループでの作業に必要なルールとして、対話の最も基礎・基本となるスキルを設定。具体的に説明した。

- ①相槌を打ったり、リアクションをしたりする
- ②相手の顔を見て話をする
- ③自分の考えを正しく伝える
- ④自分と違う意見を否定しない
- ⑤グループ全員が話し合いに参加する

(3) 発展学習【活用型学力 1】

2枚の写真（男女）を提示し、写真から読み取れる情報を基にして、各自物語の設定や描写を考えさせた。途中で、よく書けている生徒を教師が指名し、発表させた。

(4) 発信・交流学习【活用型学力 2】

各自が書いた設定や描写をグループで交流させる。習得した「対話スキル」を活用し、グループ全員で意見を出し合って協働しながらひとつの物語を作り上げるようにした。その際、グループのリーダーを中心に話し合わせた。

(5) 評価・一般化学習

各グループの代表2人が男女の役になって、出来上がった作品をクラスで発表させた。

留意した点

- ①各自、各班で設定を決める際「誰かが一人でも嫌な思いをするような内容はいけません」との声がけをすることで、安心して活動できる環境を作った。
- ②班のメンバー設定は教師が行い、安心して協働できる環境を作った。（初歩段階のため、配慮）人数を3～4人にするこで、話し合いが活性化を図った。
- ③全ての話し合いに対話のスキル（習得2の段階で指導した内容）を意識させるようにした。また、対話が活発になるための手立て（発信・交流での声かけ等）を入れるようにした。

3 実践の考察

(1) 実践の成果

①対話スキルの習得—対峙・共同・場面性の練習—

本単元では、基礎・基本的な対話のスキルとして「相槌」「リアクション」「相手の顔を見る」「全員が積極的に意見を言えること」「全員の思いを聞くこと」等協働する態度を重視させた。また、発言を引き出し、話し合いを活発にするために「なぜそう考えたのですか？」という声かけをルールのひとつとした。

授業の最後に、対話スキルの項目を提示し、「よくできた」「できた」「まあまあできた」「あまりできなかった」「できなかった」5段階で自己評価をさせた。その結果、全ての生徒が4～5の高評価を出すことができた。

②安心して積極的に協働できる環境づくり

本実践を行うにあたり、心配していた生徒がいた。普段あまり集団に溶け込むことができず、クラスで孤立している自己肯定感の低い生徒である。しかし、実際の活動では「教師がグループのメンバーを決めたこと」「話を受け入れてもらえる環境（ルール）があったこと」「3～4人の編成により各自に責任が生まれたこと」等により、とても良い表情で積極的に活動に参加できていた。授業後には「とても楽しかった」と話しに来てくれた。

(2)今後の課題・改善の手立て

今回成果を残すことができたのは、他のクラスでの実践から出た反省を基にして、修正や改善を加えた1クラスである。そこで、他クラスで出た反省と改善の結果から、今後の協働的な学びに必要な課題が見えた。

①協働的な学びが動き出す声かけの必要性

初めは、発信・交流学习の段階で「なぜそう考えたのですか？」という声かけをするというルールは設定していなかった。その結果、考えの発表になってしまい、そこから話が深まったり、リアクションが生まれたりすることはほとんどなかった。しかし、この言葉を設けたことにより、設定の裏に隠された生徒の思いや考えを話すことになったため、頷きやリアクション、会話の繋がりや深まりが生まれ、より積極的な対話が行われた。そして、「なるほど！その考えいいね！」等話の広がり生まれ、グループでの設定や描写等スムーズな活動が行われていた。対話活動による協働的な学びが行われるようにするためには、対話が動き出す一言を教師が提示する必要があるとわかった。

②振り返り時間の十分な確保で確かな学力の定着を

これは全てのクラスの実践に共通して言えることだが、本実践では、活動に時間をとられてしまい、振り返りの時間を十分に確保することができなかった。そこで、活動に対する振り返りのみになってしまい、物語の「設定」「描写」「構造」といった習得事項の確

認や、友人の意見を聞いて協働的に学ぶ中で感じたことや学んだことをまとめる時間がなかったため、単に楽しかった活動で終わってしまったように思われた。

授業が終わった時、自分は何を感じて、何を学び、何ができるようになったのか等をしっかりと振り返り、「習得型学力」「活用型学力」の定着度合いをメタ認知する時間をきちんと設け、学習事項の確かな定着を図る必要があると感じた。

4 実践内容 2—言語への関心・意欲の向上—

本実践では、言葉の力を再発見し、言葉を使って積極的に繋がろうとする姿勢を育てたいという観点から、『感覚を言語化する』という教材を使って「言葉の力について認識を深め、言葉で繋がることの豊かさの意味を考えよう」という単元を設定した。

本文を読解する中で、自己の人生と言葉、コミュニケーションの関係を振り返らせて実感させ、これからの人生における言葉の発進の在り方、コミュニケーションの仕方を考えさせる指導を行った。

(1) 導入・基礎学習【習得型学習 1】

人間の五感とは何かを生徒に問い、この中で人が最も優れている感覚とは何かという話をして、感覚に興味・関心をもたせ、中2教科書教材・田崎真也『感覚を言語化する』を範読した。その際、筆者である田崎信也氏の職業を抜いておき、ソムリエという言葉を出させた。

(2) 基本学習【習得型学力 2】

本時で最も考えさせたい4段落に焦点化。段落に書かれている「いつでも“あの時”の感覚を再確認できるのです。」について、本文に出てきた具体例の他にも、生徒の生活経験に近い具体例を提示して説明した。その結果、「わかる!」「あるある」といった声が上がった。

(3) 発展学習【活用型学力 1】

「～を(五感)すると、～を思い出す」という型を提示し、それぞれ好きな感覚を使って自分の感覚を言語化させた。あらかじめ身近な具体例を提示しておいたことで、全ての生徒が自分の感覚を言語化することができた。

(4) 発信・交流型学習【活用型学力 2】

各自書いた考えを周りの友達と交流させる時間を設けた。また、机間指導の中で良かった作品は、教師が指名して発表させた。

次に、5段落に書かれている「このこと」が示すものを本文から見つけさせ、なぜ「相手のことを知ること」「相手のことを考えながら行う上手な会話」が人生を豊かに過ごすのに大切なのかを考えさせた。自分の経験と結びつけて考えるように指示を出した結果、どの生徒も自分の経験と結び付けてとても具体的に深くまで考え、よく書けていた。

(5) 評価・一般化学習

今回の授業を受けて、「感じたこと」「わかったこと」「考えたこと」を書かせた。言葉の豊かさをコミュニケーションと結び付けて考え、人間関係における言葉について書いている生徒が多く、言葉で伝え合うことの豊かさを実感させることができた。

5 実践の考察

(1) 実践の成果

①自分の経験と結び付けて考えさせることで、言葉、コミュニケーションと人間関係の繋がりを掴ませる

本文に書かれたことを基にして、なぜ「相手のことを知ること」「相手のことを考えながら行う上手な会話」が人生を豊かに過ごすのに大切なのかについて、自分の人生経験を基にして考えさせた。

- ①誰にでも会話は欠かせないもので、どのような場合でも相手に伝わらなければ人生は上手くいかない。しかし、相手を良く知り、上手に会話をして感覚を言語化するように言葉を豊かにすれば、人間関係だって人生だって豊かになるから
- ②自分が豊かに生きるには、身の周りの人とコミュニケーションをとって情報をたくさん取り込み、自分の生き方をどう豊かにできるのか探ることができるから
- ③相手のことを知らなすぎると、その時のことを明確に伝えられなかったり、共感してもらえなかったりする。相手のことを知っていれば、こう伝えた方がよりわかってもらえるんじゃないかと考え、会話がはずむと思う。だから、相手の気持ちになってみるためにも相手を知っておいた方がいい

どれも生徒が経験から実感した思いが溢れており、言葉(会話)と人間関係の繋がりを考えさせることができたと考えられる。

②これからのコミュニケーションを見つめ直す

授業の最後に書かせた「感じたこと」「わかったこと」「考えたこと」の記述には以下のようなものがあつた。

【資料 3 国語 生徒の振り返り・感想記述】(一部)

- ①私がこの教材で学んだことは、感じたことや見たことなどを言葉にして発信できるということです。その時の感動や喜び、悲しさなどを人にその時のように伝えることは難しいと思っていたけど、色々なことばを使って表現するのは楽しかったです。そしてたくさんの言葉を使って表現を豊かにして、相手との会話が楽しくできるようにしていきたいです。
- ②私はよく説明が下手だと言われるので、取り返しのつかないことになる前に今のうちから言葉を使いこなす訓練をいっぱいしておきたいと思います。
- ③言葉について考えた私の結論は“相手を知ることが大切”でした。私は人と話すことが苦手なので、今日学んだことをふまえて生かしていきたいと思いました。

学びをこの時間だけに留めず、一般化し、今後の人間関係やコミュニケーションの在り方に広げさせることができた。この授業を通して、コミュニケーションに対する関心・意欲や積極性が出たことは、今後の協働的な学びの中での繋がりに役立てられるだろう。

(2) 今後の課題・改善の手立て

①伝統的な言語文化として言葉を考える段階まで引き上げる

生徒は自分の生活経験と言葉を結び付けて考えることができていた一方で、自分の経験より大きな範囲で考えることができなかったため、言葉の真の力、真の豊かさの発見まで辿りつくことができなかった。

自分達の経験の中で理解できる範囲と、教師が導き説明してやることで到達できる範囲があるため、最終的には教師の力で言葉の魅力の新しい発見、意義の理解等（伝統的な言語文化としての理解）まで引き上げる必要があった。

そこまでもっていかなければ、国語科としての言葉の意義の習得、活用には届いていない。そのためには、広い範囲で言葉について考え得られる補助教材を用意し、習得させる必要があった。

②実生活での活用—他者・情報に対して—

感想の中には、授業から何を感じた、何を学んで、これから自分はどうするのかといった感想がたくさんあった。これは、これからの実生活に活かそうとする一般化された学びとして成果であると考えられる。

しかし、「相手を知るために何をしていくか」「会話の中で相手を知るにはどうすればよいのか」といった切り口で、“他者の言葉”にまで目を向けさせることができなかつたと気づいた。つまり、言葉で“伝え合う”段階の豊かさまではもっていきけていない。コミュニケーション（特に対話）は、自分の言葉と他者の言葉、言葉の発信と受信があってこそ成り立ち、深い会話になっていくため多角的で多面的な視点をもって、“他者の言葉”から相手を理解して、読み取る力も必要である。「言葉を通じて相手を深く知ることができる」というところまでもっていく必要があった。

VI 授業づくり実践（教師力向上実習Ⅱ）

確かな判断力を育てる対話力の育成 —思考を再構築する対話活動を中心に（中学校国語科）—

1 テーマ設定の背景と実践計画

実習Ⅰで行った「協働しやすい環境づくり」「言語への関心・意欲の向上」といった、自立・協働・創造的な学びを行うための土台づくりを経て、本実践では実際に「対話活動」を取り入れた協働的な学びの実践を行った。その際、4月から教壇に立つ者として「自立・協働・創造による習得・活用型学力の育成」「教育課程

の構造化」「判断力の重要性」といった現代の教育に求められている要素を取り入れること、また、活動の中には生徒の実態や実習Ⅰでの成果や反省を踏まえた工夫した手立てを打つことを心がけた。本実践で留意した点は以下の5点である。

【資料4 国語 実習Ⅱ実践で留意する点】

- ①対話のスキルをより確かに定着させ、他の教科、普段の生活における人間関係に活かせるようにする。
- ②協働的な学習に臨む前に、ひとりひとりが根拠を明確にした自分の考え（判断力）を持ち、自立できるようにする。
- ③相手を尊重し合う対話活動の中で、考えを比べながら協働し、思考に広がりや深まりを出して、豊かな思考の中からより確かな考え（判断力）を再構築して創造することができるようにする。（国語科学習指導要領 中学校第2学年「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」目標の観点の達成に向けて）
- ④協働学習に対して意欲的に取り組むことができるようにする。
- ⑤授業を終えた時、「何ができるようになったのか」を生徒自身が理解し、成長を実感することができるようにする。

「協働的な学びのための対話活動」として、本実践では「セールス対話」という活動を手立てとした。

セールス対話：①様々な場面に応用可能な対話スキルの習得②2人で対話しながら選んだ言葉の理解を広げ、深め、より確かな判断力を再構築する活動

2人ペアになり、セールスマンとお客さんに分かれる。セールスマンは自分の選んだ言葉をセールスシートに従って説明。お客さんはセールスを聞いて思ったことや考えたことをセールスマンに話し、対話がスタート。（具体的な内容は実践内容に記す）

活動を活発にするための手立て

セールスマンの話し方や内容をお客さんがチェックする「小切手シート」、お客さんの話の聞き方や話の広げ方をチェックする「お礼シート」を設けた。これらは各5項目あり、1項目ずつ金額が決まっている。合計金額を競う。

本実践内容—国語科—

③対話活動を通じて確かな判断力を育成する
セールス対話を通じて、言語文化である擬声語・擬態語の理解を深めよう（中2教科書教材 山口仲美『古典の中の擬声語・擬態語』）

2 実践内容

(1) 導入・基礎学習【習得型学習1】

導入では、おいしそうに飲み物を飲む時の音を表す

のは「ゴクゴク」か「ガブガブ」のどちらが正しいか、深い眠りを表すのは「ぐっすり」か「すやすや」のどちらか等、擬声語・擬態語のクイズをして生徒の関心を高めた。その後、このような物の音や状態を表す言葉を何と言ったか問い、「擬声語」「擬態語」という言葉を出させて本文の読解へと入った。クイズにより、生徒は意欲的に教科書を読んでいた。

(2) 基本学習【習得型学力2】

本文の内容理解は、全体を大きく5つに分け、段落ごとに読解していった。全体を通じて理解させたい要点は2点ある。「擬声語・擬態語」の魅力ある効果を理解させること。古典作品が書かれた何千年、何百年前から今と同じように「擬声語・擬態語」が使われていたという事実の理解から、日本語を魅力ある文化として理解させること。授業を終えた生徒の感想には、「擬声語・擬態語」の効果に対する感想や大昔との繋がりを知った驚きの言葉が多く、学びの多い授業を行うことができた。以下は生徒が書いた感想の一部である。

日本で擬声語・擬態語の文化が生まれたのは、日本人がたくさんのもを感じ、人に伝えようとしたからだと思う。古典でも現代人でも人が感じていたことは同じ。

(3) 発展学習【活用型学力1】

何千年と残り続けて、これからも生き続ける言語文化「擬声語・擬態語」という観点から、自分が「100年後に残したい擬声語・擬態語・掛詞」を選ばせ、その用法や魅力を書かせた。次の段階でセールス対話を行うため、書かせるワークシートの型はセールス文の形にしたセールスシートとした。また、工夫して話し方を変えて良いこととした。(資料5・中央部一線)

「100年後に残したい擬声語・擬態語・掛詞」が浮かばない生徒には、いくつかの擬声語・擬態語をまとめたお助けカードを見せ、1枚選んで書かせるようにした。その結果、全ての生徒がセールスシートを書き上げ、自分の考えをもつことができた。

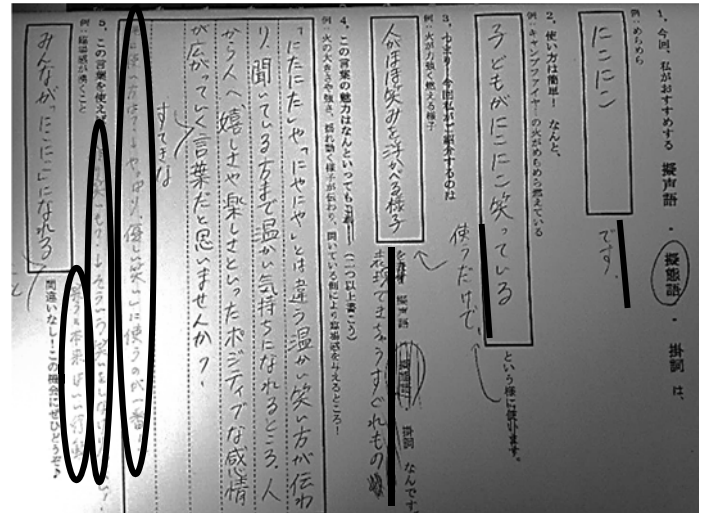
(4) 発信・交流学习【活用型学力2】

各自が書いたセールスシートを基に、セールス対話というゲームを行った。

セールス対話は全3回行わせ、その合計金額を競わせるようにした。各セールスの間には、「セールス改善」の時間があり、生徒たちはチェック項目を増やして、稼ぐ金額を上げようと、練習をしたり(対話スキルの習得)、友人の言葉を赤ペンで記入して参考にし、考えを増やしたりと(思考の広がりや深まりによる確かな判断の再構築)、自ら意欲的に取り組むことができていた。

- ①友達と対話する中で気づいたことや新しく生まれた考えを赤で記入(資料5・○)
- ②チェック項目、アドバイスを踏まえてメモ、練習

【資料5 国語科 生徒のセールスシート】(一部)



【資料6 国語科 小切手・お礼シート】

小切手

¥ _____

- ・商品である擬声語・擬態語・掛詞の魅力が十分に伝わってきた。
- ・「なるほど」「面白い」など新たな考えを知ることができた。
- ・お客様の話をもとにして、考えを広げたり深めたりしていた。
- ・お客様の顔を見てははっきりとわかりやすく話をしていた。
- ・どの情報も納得できるものだった。

お礼

¥ _____

- ・セールスマンの話をうなずきながら聞くことができていた。
- ・セールスマンの主張を正しく捉えることができていた。
- ・質問や反論、話を広げるなどして積極的に話をしていた。
- ・セールスマンの話をもとにして、考えを広げたり深めたりしていた。
- ・セールスマンの顔を見てははっきりわかりやすく話をしていた。

(5) 評価・一般化学習

セールス対話を終えた後、自己評価シートを使って、教科書の内容の理解である習得面と、セールス対話の内容や態度についての活用面の双方を自己評価させた。

3 実践の考察

(1) 実践の成果

本実践では、『古典の中の擬声語・擬態語』の内容理解(習得)を基盤とし、「100年後に残したい擬声語・擬態語・掛詞」を考え、思考の広がりや深まりを促すセールス対話(活用)を通じて、広く深く考えて導き出した確かな自分の考え(確かな判断力)を全ての生徒が構築できるようにすること、その結果として誰一人欠けることなく協働的な学びを行うことができるようにすることを目指している。

また、繰り返し行うセールス対話により、他教科の協働的な学びや実生活における人間関係に活用することのできる対話スキルを、より短時間で効率よく身に

つけさせたいと考えて行った実践である。

「協働的な学びのための対話」としてのねらい

- ① 習得・活用型の学習段階…活用型学力 1,2 の保障
評価・一般化学習の保障
- ② 単元目標 (本時)…授業で学んだことを活かし、自分がこれから 100 年後まで残したい擬声語・擬態語・掛詞を考え、交流し合うなかで、日本の伝統的な言語文化について考えを広げたり深めたりすることができる。⇒目標の達成に結びつく充実した活動を行う
- ③ 評価基準…これから 100 年後まで残していきたい擬声語・擬態語・掛詞について「自分の考え、解釈」をもち、根拠や具体例を基にして他の人にプレゼンテーションしたり、相手の言葉に反応しながら積極的に聞いたりすることができる。⇒学びとしての評価を定める
- ④ 学力…「判断力 (自分の考えや解釈をもつ)」
「対話力 (伝え合うための言語力の習得)」
⇒学力の向上を図る

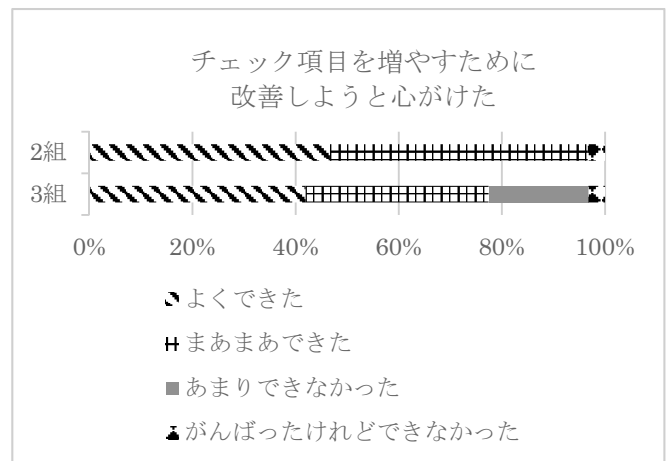
①伝え合う力 (対話力) の育成 向上し続ける場の設定

本実践では、セールス対話の道具として、対話スキルが具体的に書かれたチェックシートを使った。チェック項目を増やし、金額を上げようという意欲を利用して、スキル習得に向けた意欲が高まるように工夫した。その結果、ほぼ全ての生徒 (約 97%) が「小切手シートやお礼シートのチェック項目を意識してセールスすることができた」と答えた。

また、その意識の具現化として「チェック項目を増やすために改善しようと心がけた」という生徒が多かった。このような意欲向上の結果、「セールスの回数を重ねる度にチェック項目を増やすことができた」という評価に対して「できなかった」と答えた生徒がひとりもいなかった。意欲の向上により、短時間で対話スキルの習得が成されたことがわかった。尚、「小切手シートやお礼シートのチェック項目を意識してセールスすることができた」「セールスの回数を重ねる度にチェック項目を増やすことができた」のグラフは、紙面の関係で詳細は省略。

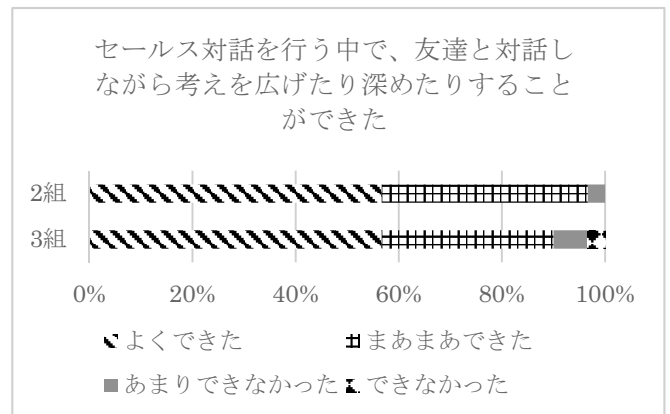
以下は生徒がメモした対話スキル習得に向けた改善点の一部である。

- ①聞き方を変えると話が広がる。
- ②ジェスチャーを入れた方がより伝わる。
- ③相手の話を最後まで聞いてから質問した方がいい。
- ④話し方を変えたほうがいい。はっきり？



②協働による思考の広がり (単元目標の達成)

本実践では、セールス対話を通じて、思考の広がりや深まりが生まれることをねらっていた。他者の多様性や豊かさ (情報) と対話することが、より確かな判断に繋がると考えるからである。3 回のセールス対話を終えて、ほとんどの生徒が「セールス対話を行う中で、友達と対話しながら考えを広げたり深めたりすることができた」と答えた。



セールス対話間にある「セールス改善の時間」は、友達との対話によって新たに気づいたことや考えたこと等を赤で書き込ませる活動であり、まさに思考の広がりを記す活動である。以下は生徒がメモした新しい考えの一部である。

- ①「ほくほく」: 聞くだけで湯気が想像できる。汁物には使えないけど、柔らかい固体に向いている言葉。
- ②「トントン」: だく点がついて「ドンドン」になると怖く強くなるから様子が変わる。トントンは優しいノック。
- ③「ざあざあ」: 雨じゃなくて波の音に使う方がきれい。
- ④「パラパラ」: 雨の様子だけじゃなくて、窓にあたる音にも使える。ザアザアと違って弱い雨だと音でもわかる魅力有り。
- ⑤「リンリン」: 季節限定の鳴き声だからいい

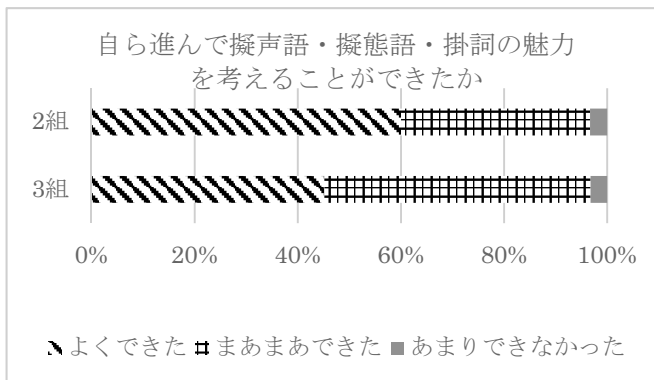
③確かな判断力の育成

自分の考えをもつこと（判断力）ができない生徒の中には、「考えをもつことが面倒くさい」「どうせ発表しないのだから考えなくてもよいだろう」という消極的な考えをもっている生徒もいるように思われる。

しかし、本実践のように、「自分の考えが授業に活かされること」「自分の考えが他者に認められること」「自分の考えについて友達と検討し、考えを深めたり広げたりすること」で自分の考えに愛着がもてるようになることにより、授業が進む中で、ほぼ全ての生徒が自ら進んで考え、確かな自分の考え（確かな判断力）をもつことができた。

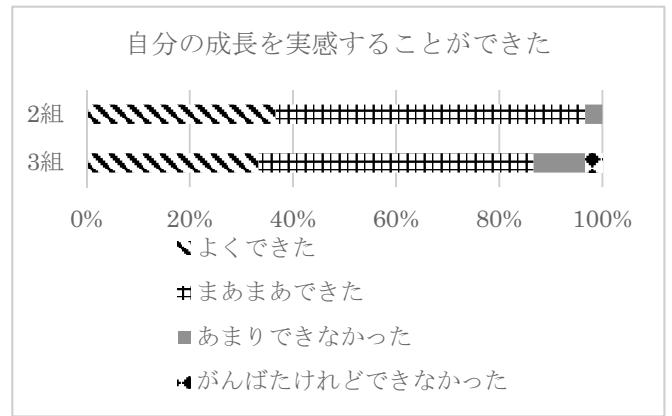
また、初めは自分の考えをもつことができず、お助けカードを使って、なんとかセールスシートを埋めた生徒が、セールス対話の回数を重ねる度に、友達のアドバイスや自分の発見をどんどん赤ペンで書き込み、楽しそうに堂々とセールス対話を行っていたことから、判断力の育成が見受けられた。

その結果、全ての生徒が自分の意見を持ち、セールスシートを書くことができた。そして、自己評価シートでは、ほぼ全ての生徒が「自ら進んで擬声語・擬態語・掛詞の魅力を考えることができた」と答えている。



④成長を実感できる場の設定

本実践では、回数を重ねる度に、1回目にはチェックが付かなかった項目も、意識して心がけることによって、2回目にはできるようになり、チェックがつくことで、自分のできるようになったことが視覚的、段階的にわかりやすいようになっている。その結果、ほとんど全ての生徒が「自分の成長を実感することができた」と答えた。成長の実感は、習得した事項を今後も活用していこうとする意欲の向上に繋がると考えられる。また、3回目のセールス対話で小切手シート（話す力）全てにチェックがついた生徒は全体の56%、お礼シート（聞く力）全てにチェックがついた生徒は63%だった。3回のセールス対話で半分以上の生徒が思考を広げる協働的な対話学習や対話スキルの習得ができたことがわかった。



⑤全ての生徒が活躍できる協働的な学びの対話

本実践の最後に、合計金額が1位の生徒が誰かを明らかにした。すると、普段決して学力が高くはない生徒が1位になっていた。本実践では、どの学力の生徒も活躍できる場、どんな性格の生徒も成長を実感することのできる機会を設けることができた。生徒の感想の中には次のような記述があった。

【資料7 国語 自己評価シート感想】（一部）

- ①学力・能力がやや低く、学習意欲の低い生徒
⇒毎回終わる度に反省して成長できてた。それが成果に出てうれしかった。
- ②学力・能力は高いものの異性の生徒と共に学ぶことが苦手な生徒
⇒自分では気づかなかった意見が聞けてよかった。ちゃんと聞いてくれたから話しやすかった。
- ③学力があまり高くなく、話すことが苦手でグループワーク等が嫌いな生徒
⇒話すことが苦手だったけど、これならできたから楽しかった
- ④学力・能力のとても高い生徒
⇒もっといろんなセールスが聞いてみたいと思った。

(2) 今後の課題・改善の手立て

①思考の広がりをもっと確かなものにする一言の設定

「セールス改善の時間」に行われた赤ペンで書き込みは2組24人、3組6人と大きく差が生まれた。3組で思考の広がりがあまり見られなかったため、2組ではセールス文の最後に「この言葉どう思いますか？」という言葉をつけた結果がこの差である。実習Iの時と同様に、今後は、活動を活発にする一言は何がふさわしく効果的なのかを教師が吟味し、取り組ませる必要がある。

②活動の中で国語科としての深い学びを

今回の授業では、擬声語・擬態語の役割や意義の理解が重要なはずだが、セールス対話の活動では、聞く力や伝える力に力点が置かれてしまった。その結果、活動重視になってしまい、国語科固有の知識としての深まりや確かな習得が不十分であった。そこで、最後に全体（集団）として擬声語・擬態語の意義や魅力を

再度共有し、認識させる時間（例えば、良くかけている生徒に全体の前で発表させる等）が必要だったと思う。協働的な学びをより深く確かなものとして定着させるためには、最後にもう一度全体で共有し、共通の理解を持つことが重要であると考えられる。（本実践では授業通信を出して共有を行った。）

Ⅶ 今後の課題と展望

（１）自立に繋がる判断力の育成

—自己・情報との対話の充実—

これまで行われてきた対話活動の実践、本実践のセールス対話共に、対話活動は「他者」との相互交流、伝え合い等、表面的な学習形態や意欲を上げるための工夫としての実践が多い。しかし、今後は本実践のセールス対話文構成、セールス改善の時間に設けたような「自己の考え」「他者の思いや考え」「新たに読み取れた情報」との対話がより活発に行われるような授業開発が必要なのではないかと考える。「自己」「情報」との対話は、「習得・活用型学力」「人間性・社会性」を身につけた自立した人材の育成に繋がり、協働や創造に繋がるのではないだろうか。

（２）対話による成長の評価

対話による学習は、思考過程での変化・成長が最も重要であると考えられる。しかし、その過程の評価（どれだけ読み取れてきたか、考えがどのように変化したか等）を確認し、評価することは簡単ではない。そこで、対話による成長の変化（本実践では赤ペンによる書き込み等）を評価できるようなワークシート、ノート の書き方、発問等を工夫した授業、それに伴う評価の観点を教師が確実に設定して行う必要がある。評価できてこそ学びのための確かな活動になると考えられる。

（３）対話による成長が社会を生き抜く力に

本実践の結果から、授業の構造化を意識した手立てとして、「自己・他者・情報との対話」が用いられ、学びを評価することができれば、対話は「思考・判断・表現」といった「活用力」と「人間性・社会性」の双方を育成する手立てとなることがわかった。そのため、確かな判断力を育成する対話力の育成は、「新しい時代に必要となる資質能力」の育成に向けたステップとなり、「社会を生き抜く力」に繋がると確信した。

Ⅷ おわりに

「愛子先生がいてくれて本当に嬉しかったし、ホッとしました。先生と話す時間は、楽しくて心が落ち着く時間でした。私は本当に愛子先生が大好きです。ずっとずっと愛子先生の優しさ、明るさ、全部を忘れません。これから愛子先生が行ってしまう中学校が本当にうらやましいです。でも、そこでA中学校よりも楽しい思い出を作ってくれたら、悔しいけれどもうれしいで

す。またいつか必ず会えるように私は色々なことを頑張りたいです。そのときまで愛子先生もずっと頑張ってください。」

ある生徒が最後にくれた手紙の一部である。いつかまたこの生徒に出会った時、胸を張っていられるように、教師としての情熱とプライド、2年間の学びと愛しいたくさんの生徒達への溢れる思いを胸に、4月から頑張っていきたい。

【注記】

注1 佐藤洋一編著『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル（全4巻）』（明治図書、2011年）参照。

注2 佐藤洋一編著『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル（全4巻）』（明治図書、2011年）を基に宮田が作。

【主な参考文献】

1 文部科学省関連

『中学校学習指導要領解説 総則編』（文部科学省 2008年9月）、『中学校学習指導要領 国語編』（同9月）『第2期教育振興基本計画』（中央教育審議会答申 2013年6月）、「初等中等教育における教育課程の基準の在り方について」（同、2014年11月）。

2 実践関連

村松賢一著『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習』（明治図書 2008年）、多田孝志著『授業で育てる対話力 グローバル時代の「対話型授業」の創造』（教育出版、2011）、山口仲美『日本語の古典（岩波新書）』（2011年）、同『ちんちん千鳥のなく声は（講談社学術文庫）』（講談社、2008年）、小野正弘『オノマトベがあるから日本語は楽しい（平凡社新書）』（2009年）、有田弘樹（学会資料）「自分の「生き方・考え方」を見つめなおし、実生活につなげようとする生徒の育成」（2014年）、松山宜伸（発表資料）「国語科古典学習を例にした全教科・活動の中核となる言語力・活動・評価開発」「第75回国語教育全国大会（中学校・古典文科学会）」（日本国語教育学会・東京、2013年8月）、佐藤洋一・有田弘樹「随筆教材のテキスト形式を生かす『習得・活用』』『批評』（『愛知教育大学研究報告 第63輯』愛知教育大学、2014年3月）、（研究集会発表資料）『「思考力・判断力・表現力等」の学力育成・評価からの教育方法・授業改善—報告・鑑賞・批評（言語力）による学びの「自立・協働・創造モデル」へ—』日本教育大学研究集会（2012年）等。

【付記】

教職大学院2年間の主な実習は、「学校サポーター実習」「教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ」（名古屋市立A中学校）「教師力向上実習Ⅲ」（稲沢市立B中学校）「多様なフィールド実習」（中日新聞社）、実習中は多くの先生方に温かいご指導・ご助言をいただきました。今回、この場でお名前を挙げることはできませんが、お世話になった全ての先生方に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、サポーター実習・教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ・修了報告書等で熱心にご指導してくださった佐藤洋一先生、中山弘之先生、教師力向上実習Ⅲでご指導くださった中妻雅彦先生、多様なフィールド実習でご指導いただいた志水廣先生、ご指導・ご助言をくださった全ての先生方に心から感謝申し上げます。